

高知の高校野球ファンの皆様へ

以前発刊いたしました土佐路の白球（高知の高校野球 50 年史の
続編となります。

以下はその一部を抜粋したのですが、本野球史をご希望の方は、
高知県高校野球連盟事務局に一部在庫がございますので、下記まで
ご連絡下さい。

〒780-8010 高知県高知市棧橋通 2-11-6

高知県高等学校野球連盟 事務局

Tel/Fax. 088-831-1018

e-mail kochi_koyaren@yahoo.co.jp

土佐道 野球

高知県高校野球史

平成 8 (1996) 年 - 平成 20 (2008) 年



高知県高等学校野球連盟

激闘あの時

明德義塾 悲願の

2002年8月21日
全国高校野球選手権大会
決勝
明德義塾 7-2 智弁和歌山



智弁和歌山の最後の打者を三塁ゴロに打ち取り、エース田辺(中央)に駆け寄る捕手寛、三塁梅田。
右後方は感極まりグラブで顔を覆ってしまった主将の遊撃森岡 [中日新聞提供]



4回表、スクイズ外す [中日新聞提供]



3回裏明德義塾二死二塁、沖田が右中間に先制の三塁打を放つ [中日新聞提供]

全国制覇

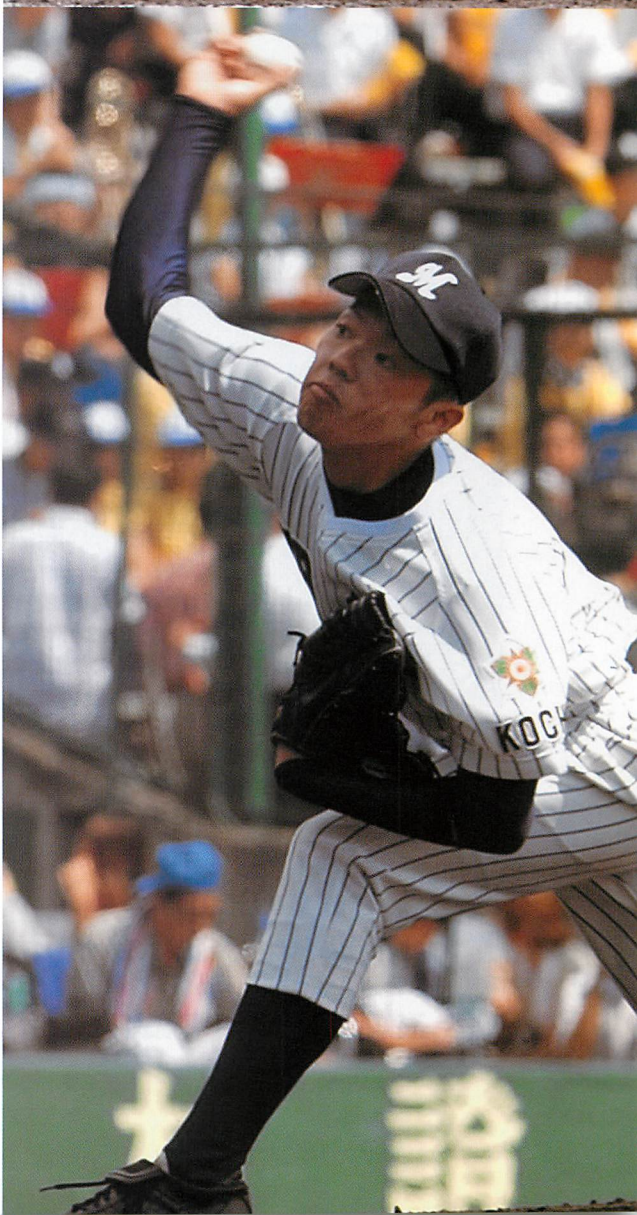


感激の校歌を聞く明徳ライン

7回裏一死、二塁で左越えタイムリー三塁打を放った森岡「中日新聞提供」

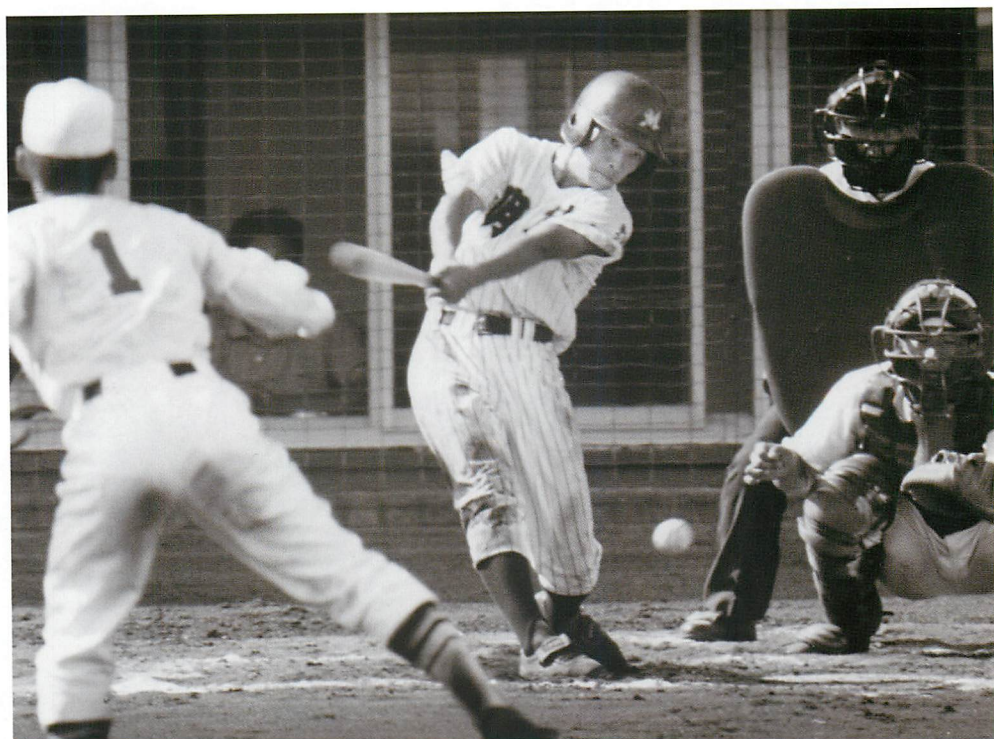


4連投となる決勝戦で力投する明徳田辺「中日新聞提供」

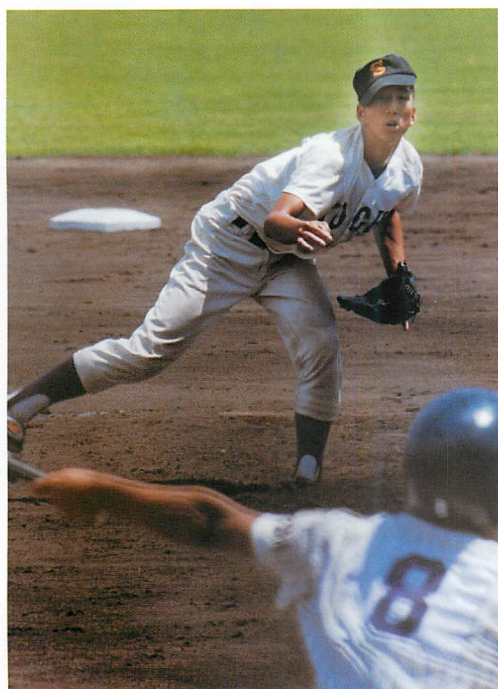


激闘あの時

1996年7月28日
全国高校野球選手権県大会
決勝
明德義塾 7-5 土佐

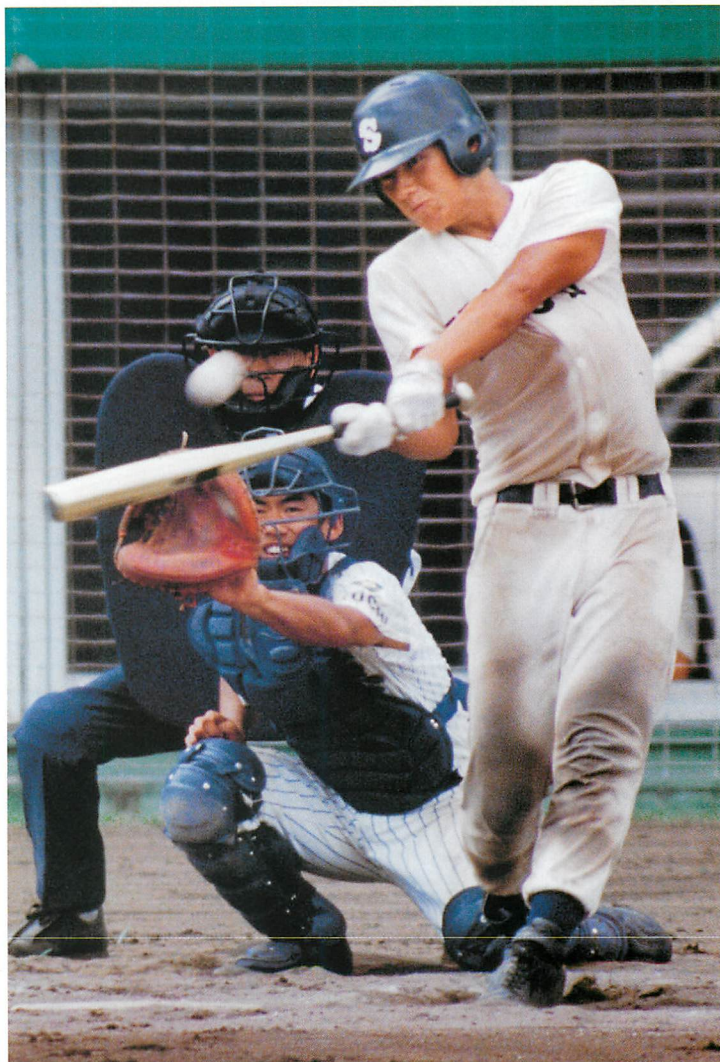


延長13回表明德義塾無死三塁、高見が勝ち越しの中前打を放ち6-5とリードする。投手猪野、捕手安岡



3回からロングリリーフ。明德打戦を7回2安打に抑え込んだ高知商藤川球

1997年7月29日
全国高校野球選手権県大会
決勝
高知商 1-0 明德義塾



高知商8回、先頭打者の藤川順が2球目の内角ストレートをたたいて左翼芝生席へ先制の本塁打。捕手寛

1998年4月5日
選抜高校野球大会
準々決勝
PL学園 3-2 明德義塾



9回表明徳義塾無死、先頭の寺本が右中間スタンドソロ本塁打を放ち2-1と勝ち越す
[中日新聞提供]

8回まで好投の明徳・寺本投手は延長10回
連続四死球でついに力をついた [中日新聞提供]

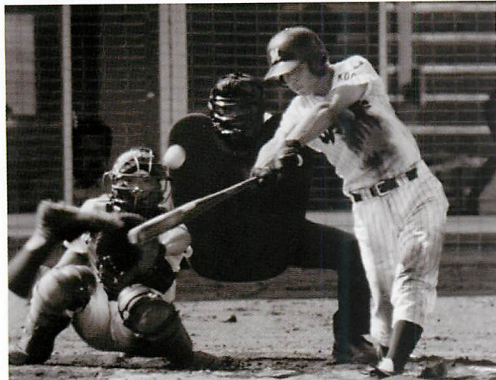


1998年4月12日
春季四国地区高校野球大会
県代表決定戦
高知 4-3 明德義塾

7回表高知二死一、二塁、三番西村が中越えに2点適時二塁打を放ち3-3の同点に追いつく。捕手津呂橋

激闘あの時

1998年7月30日
全国高校野球選手権県大会
決勝
明德義塾 2-1 高知



11回裏明德義塾二死、五番谷口が左中間にサヨナラ本塁打を放ち、熱戦に決着。捕手西村



11回で14三振を奪った明德の左腕寺本。176球を投げ切った



8回、左越え三塁打を放ち、県勢2人目のサイクル安打を達成した明德・藤本 [中日新聞提供]



4回表明德義塾二死一、二塁、倉繁が右前に先制のタイムリー打を放つ [中日新聞提供]

1998年8月21日
全国高校野球選手権大会
準決勝
横浜 7-6 明德義塾



2002年7月24日
全国高校野球選手権県大会
準々決勝
明德義塾 6-4 岡豊

9回裏岡豊一死満塁、左飛で土居智がタッチアップするも途中で引き返しタッチアウト。ベースカバーは三塁梅田。右端はアウトを喜ぶ遊撃森岡



8回裏明德義塾二死一塁、沖田が右翼ポール際に2点本塁打を放ち6-6の同点とする [中日新聞提供]

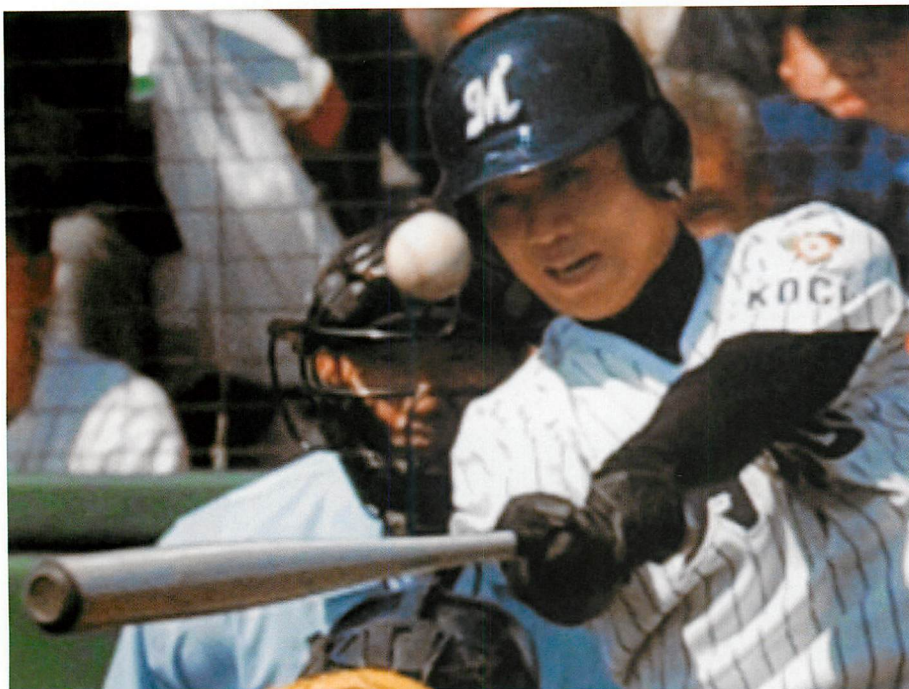
2002年8月18日
全国高校野球選手権大会
3回戦
明德義塾 7-6 常総学院



8回裏明德義塾二死、同点本塁打の沖田に続き、森岡が右翼スタンド中段に運ぶ勝ち越し本塁打を放つ [中日新聞提供]

激闘あの時

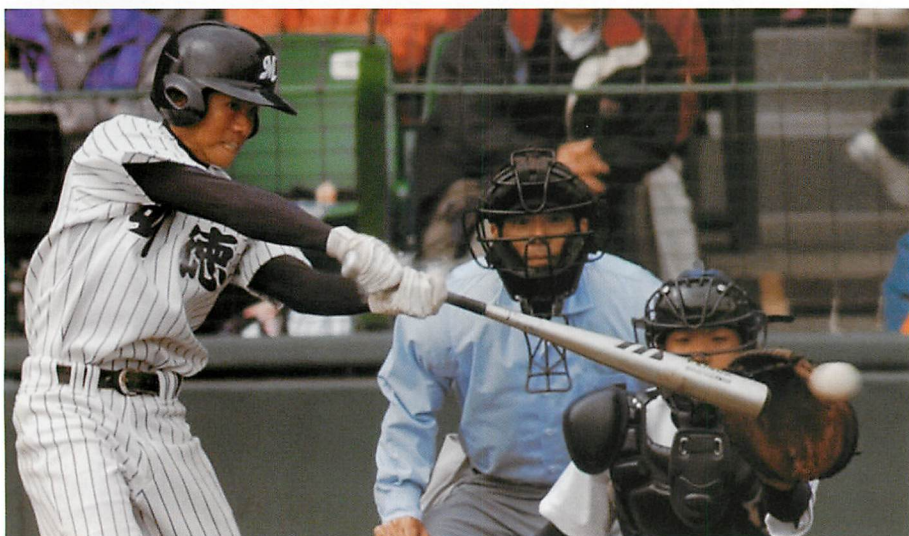
2003年3月29日
選抜高校野球大会
3回戦
横浜 8-4 明德義塾



8回裏明德義塾二死一、三塁、山口が左越えに同点のタイムリー二塁打を放つ【共同通信社提供】

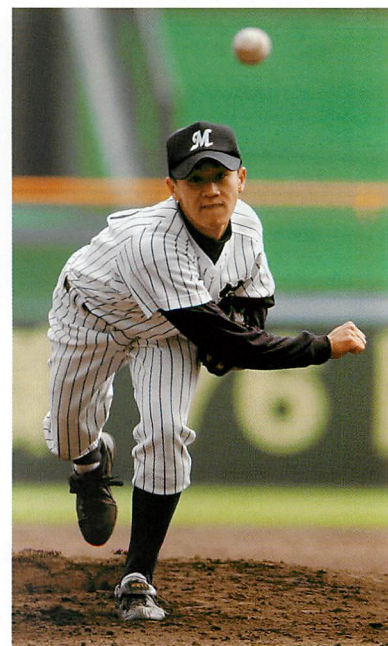


延長12回、187球を投げ切った2年生のエース 鶴川。敗れはしたが、胸を張れるピッチングだった【中日新聞提供】



6回裏明德義塾無死一塁、松原が、6点を呼び込む三塁強襲安打を放つ【中日新聞提供】

2004年4月3日
選抜高校野球大会
準決勝
済美 7-6 明德義塾



4回以降、済美を1安打に抑え、反撃を呼び込んだ明德二番手松下建の投球【中日新聞提供】

土佐路の白球 目次

発刊にあたって	2
歴代会長・歴代理事長	4
歴史編	
平成 8 年	6
平成 9 年	23
平成10年	42
平成11年	63
平成12年	83
平成13年	105
平成14年	126
平成15年	151
平成16年	171
平成17年	193
平成18年	213
平成19年	235
平成20年	258
記録編	271
コラム「平成 9 年に 1 大会26本塁打」	39
「延長回数15回に短縮地方大会のコールドも統一」	76
「熱闘25回の延長戦を取材」	210
「四国大会で快記録を無視す」	232
「初ナイターと救急車の進入」	268

【表紙写真説明】 第84回全国高校野球選手権大会（平成14年）念願の初優勝を達成し、抱き合って喜ぶ明徳義塾ナイン（甲子園）[中日新聞提供]

【裏表紙写真説明】 第79回選抜高校野球大会（平成19年）[報徳学園－室戸] 9回裏報徳無死、前田の大飛球を背走、好捕するライト中山 [デイリースポーツ社提供]



発刊にあたって

高知県高等学校野球連盟会長

横 川 勇 夫

「土佐路の白球」のタイトルで、平成8年から平成20年の夏の大会までの13年間の高知県の高校野球のあゆみと高校球児の熱戦の足跡である記録集を発刊いたしました。これは平成8年に発行した同名の「土佐路の白球」の続編となります。

この記録集はこの間の各大会の試合において全力で白球を追い、感動のドラマを創り出した選手たちの記録であると同時に野球部員を選手・高校生としてどう育成してきたか、関係者の指導の記録でもあります。甲子園には出場できなかったが、毎日黙々と練習を重ねてきた多くの部員と生徒の夢を育てる支援をしてきた指導者の存在が今回の記録の編集と高知の高校野球を底辺から支えてきたと思います。この紙面をかりて高校野球を継続・発展させてきた部員の頑張りや指導者の努力に大きな声援を送り、感謝します。

前回の「土佐路の白球」は県高野連発足50周年の節目に発刊され、今回の「土佐路の白球」も第90回全国高等学校野球選手権記念大会という節目の年に発刊されますが、前回同



第52回秋季四国地区高校野球大会県予選決勝(平成11年)【明德義塾一高知商】

4回裏明德二死一、二塁、捕手福本の一塁けん制悪送球で、二塁走者河口が一気に本塁生還、2-1と逆転する(春野球場)

第84回全国高校野球選手権大会(平成14年)で明德義塾が初優勝。ぎっしり埋まったアルプス席に、鳴子の音がこだまする



様に、高知県高校野球の記録と資料を長年の間大切に収集・保存されてきた高知県高校野球の生き字引といわれる県高野連顧問の土居保夫さんの地道なご努力と高校野球を支えてきた関係者のご協力によって「土佐路の白球」を発刊することができました。

発刊にあたり、特に貴重な写真、データ提供に全面的な協力をいただきました高知新聞社、中日新聞社、デイリースポーツ社、共同通信社、愛媛新聞社、徳島新聞社、四国新聞社及び選抜高校野球大会を主催されている毎日新聞社に感謝を申し上げます。

第90回全国高等学校野球選手権記念大会の節目の年に発刊となり、朝日新聞高知総局には発刊に際しご協力を頂きましたことに御礼申し上げます。

今回の発刊を期に高知の高校野球を育てた先人たちが野球部員とともに創造してきた教訓に学び、学生野球憲章にある学生としての勤勉と規律を基礎として高校野球を通じてフェアプレーの精神と豊かな感情と強い意志を持つ野球部員を育成する目的を忘れることなく今後も高知県高野連と高校野球文化が健全なる発展を遂げることを念願しまして、発刊のあいさつとします。

歴代会長



初代
久武 猛彦
(県出納長)
昭和23～24年



二代
大嶋 光次
(土佐高校長)
昭和25～33年



三代
小松 生幹
(高知工高校長)
昭和33～40年



四代
曾我部 清澄
(土佐高校長)
昭和40～41年



五代
川島 源司
(高知学園長)
昭和41～46年



六代
高石 次郎
(高知学園長)
昭和46～49年



七代
川窪 芳喜
(高知商高校長)
昭和49～52年



八代
田口 信雄
(高知工高校長)
昭和52～55年



九代
沢良木 庄一
(高知東高校長)
昭和55～59年



十代
寺内 五男
(高知商高校長)
昭和59～62年



十一代
尾崎 春寿
(高知高校長)
昭和62～平成2年



十二代
中村 富和
(高知工高校長)
平成2～4年



十三代

森田 弘

(高知商高校長)

平成4～9年



十四代

野町 幸一

(高知工高校長)

平成9～13年



十五代

武市 寿雄

(岡豊高校長)

平成13～16年



十六代

柳井 正持

(高知商高校長)

平成16～18年



十七代

横川 勇夫

(高知商高校長)

平成18年～

歴代理事長



初代

邑田 一郎

(県体育課長)

昭和23年



二代

松田 昇

(高知商高教諭)

昭和24～39年



三代

山本 直四郎

(土佐高教諭)

昭和39～54年



四代

浜田 志郎

(高知工高教諭)

昭和54～57年



五代

池 仁造

(高知西高教諭)

昭和57～平成元年



六代

山本 浩文

(土佐高教諭)

平成元～9年



七代

武市 隆

(明德義塾高教諭)

平成9～18年



八代

正木 陽

(高知商高教諭)

平成18年～

平成

8 年

1996 年

明德が春夏連続甲子園 8 年ぶり達成で、常連校へ 「土佐路の白球」を発刊

平成 8 年には明德義塾が春夏連続の甲子園出場を果たした。県勢チームは戦後の黄金時代に高知商、土佐、高知、明德義塾などが何度も春夏連続の出場を果たしていたが近年は遠去かり、昭和 63 年の高知商以来 8 年ぶり、明德にとっては 13 年ぶりの快挙だった。同校は平成 2 年に竹内茂夫氏から馬淵史郎氏に監督をバトンタッチして以来、甲子園では 1、2 勝する力をつけて上位に進出。常連校、有力校の評価を受けて今日の地歩を固めている。

①小中高野球連絡協議会が発足

また、この年は小中高校野球連絡協議会が発足した年でもあった。同協議会は 7 月 1 日に高知電気ビルで小中高指導者が討論会を開き気運が盛り上がっていた。それを機に関係者が組織の構成や事業活動などを決め、7 月 15 日に正式発足した。初代会長には前土佐高野球部監督の籠尾良雄氏が就任した。

このほかでは 4 月中旬に県高校野球連盟が編集を進めていた 50 周年記念誌「土佐路の白球」が発刊された。内容は高知に野球が伝えられた明治時代の半ば以降から大正、昭和、平成の各年代に続く高校野球主体の野球記録史で、年代ごとに各チームの動きと盛衰、加えて膨大な記録も収録。A 4 判で 1029 頁に及んでおり当初は 1000 部を発行。県高野連関係者はこれで県内外からの野球記録の問い合わせにも受け応えができると肩身を広くしていた。



県高校野球連盟の「土佐路の白球」

甲子園での明德(選抜)

福井商、浜松工を倒し
準々で岡山城東に屈す

平成 8 年の第 68 回選抜高校野球大会は阪神大震災の傷跡がようやく癒えつつある西宮市の甲子園球場に 32 校が参加して 3 月 26 日に開幕、4 月 5 日までの 11 日間に熱戦が繰り広げられた。

本県代表の明德義塾は平成 4 年以来、9 年ぶりの出場だったが、甲子園は春夏を合わせると 8 度目の出場校。常連校に加わり力もつけており、1 回戦の開幕試合は 3 - 0 で福井商に快勝。2 回戦では 6 - 4 と浜松工に逆転勝ちしてベスト 8 に進出した。準々決勝ではエースの吉川昌が不調で序盤に大量点を取られ岡山城東に 6 - 1 で敗退した。

19 年ぶりに開幕試合で完封

1 回戦の開幕試合、明德義塾 - 福井商は吉川昌投手の好投、梅山捕手の快打とバッテリーの活躍で福井商を 3 - 0 で下した。試合は明德・吉川昌、福井商・鈴木両エースの好投で前半戦は 1 点を争う投手戦だった。



【明德義塾 - 福井商】7 回表明徳義塾二死三塁、梅山が左前に先制のタイムリー打を放つ。投手鈴木、捕手中田(甲子園) [共同通信社提供]

しかし、明德は 7 回に二死から高見が死球で出塁し盗塁と捕手の悪送球で三塁に進み、梅山の左前打で 1 点を先取。9 回には二死一塁から梅山が内角高めの好球を左翼ポールに直撃する大会第 1 号本塁打で 2 点を追加。投げてはエース吉川昌がスライダーを武器に 11 奪三振の力投で福井商を 2 安打に完封。開幕試合の完封は昭和 52 年に山沖之彦(中村)が戸畑戦で記録して以来、19 年ぶりの快挙だった。

6 回に一挙 5 点取り逆転

2 回戦の浜松工 - 明德義塾は吉川昌の不調で相手に先行され苦しい試合展開だった。だが 4 回に 1 点を返し同点としたあとの 6 回、梅山と中平の連打、中山の四球でつかんだ満塁から清水の一塁線突破の二塁打、江幡の右前適時打と打者一巡の猛攻で一挙 5 点を取って逆転。吉川昌も 6 回に 3 連続四死球とヒットで 3 点を取られたが、7 回以降は 1 安打に封じた。終わってみれば決め球のスライダーを武器に 13 三振を奪っていた。

吉川昌が不調で 4 強入り成らず

準々決勝の岡山城東 - 明德義塾はエース吉川昌の不調から回を追って失点を重ね 6 - 1 で岡山城東に大敗した。

優勝候補の帝京、浦和学院を連破して勢いに乗る岡山城東は 3 回に二死一塁から山上の左越え二塁打で先制。さらに四球、安打の満塁から押し出しの四球、安打で大量 4 点を奪った。次いで 6 回には三塁打と暴投で 1 点。9 回にも 3 安打でダメ押しの 1 点を加えた。

これに対し明德は岡山城東の 7 安

打に対し8安打を放ちながら適時打がなく打線が不調。4回に無死一、三塁の反撃機をつかみ山下

の中犠飛で1点を返したのみだった。

28年ぶりに県立校決勝 宿毛が中村下し初優勝 四国大会は明德が出場

第49回春季四国地区高校野球大会県予選は3月28日に29校が参加して東部、高知、春野の3球場で開幕した。大会は初日が終わって29、30の両日は雨のため2日間順延。31日に再開され、当初予定していた3日の休養日はなく試合を続行、4月6日にやっと大会を閉幕した。

今大会は1回戦の高知西－高知東工が大会初の延長戦となり攻防10回、高知東工が3－2で高知西を振り切った。2回戦では高知高専が4－2で伊野商に競り勝ったが、他の試合は有力校が順当勝ちした。

だが中盤戦以降になると波乱が続出。準々決勝では土佐の猪野投手が高知商打線を4安打に完封、1－0で高知商に競り勝った。

さらに準決勝の宿毛－土佐は宿毛が森本投手の力投で2－1と土佐を下した。続く高知－中村は両チーム合わせて33安打が乱れ飛ぶ打撃戦となり、中村が11－10で高知を振り切った。

決勝戦の宿毛－中村の対決は昭和43年の伊野商－須崎以来、28年ぶりの県立校同士の決勝対決だった。試合は宿毛の森本投手が前日に引き続きまでも力投して中村打線を7安打の1点に抑えて3－1で中村を下し初優勝した。

春季四国大会の出場を決める県代表決定戦は4月14日に春野球場で開かれ、選抜大会出場の明德義塾は吉川昌投手が宿毛打線を3安打の散発、11三振を奪う力投を披露。攻めては吉川悦が2回に左越え本塁打を放って1－0で宿毛を退けた。明

徳の県代表は7年ぶり5度目。

⑩宿毛の下村、8回に決勝打

準決勝の宿毛－土佐は宿毛が森本、土佐は猪野が好投。両チームとも8安打を放つ伯仲した攻防戦になったが、わずかに勢いに乗る宿毛が2－1で逃げ切った。

先手を取ったのは宿毛。初回到2安打で1点を先取したが、土佐も7回に二死二、三塁から小原の内野安打で同点に追いつき互角の接戦となった。予断のできない試合展開だったが、宿毛は8回に矢野の左越え二塁打、下村の中前適時打で決勝勝ち越しの1点を取り、緊迫した投手戦に決着をつけた。

⑪強風下、33安打の乱打戦

高知－中村は強風が吹く中で高知が16安打、中村は17安打の乱打戦になったが、中村が11－10の1点差で辛勝した。

乱打戦の中で中村が着々と先手を取った。2回は宮崎の本塁打と3長短打で4点。3回にも今城の本塁打などで2点を追加。6回に6－6と追いつかれたその裏、4長短打を集中して一挙4点。7回にも1点を加えて追い上げる高知を振り切った。

高知も4回に徳橋が本塁打を放つなど後半に猛追撃したが、一歩及ばなかった。敗因は強風で野手が目測を誤るなど打球への判断から大量失点につながった。

⑫森本の力投と4併殺光る

決勝戦の宿毛－中村は3－1で宿毛が勝ったが、宿毛の森本が走者を出しながらも踏ん張り抜き、バックも4併殺でピンチをしのいだ守りが光った。

宿毛は1回に中山の三塁打、恩地洋の遊撃強襲安打で1点を先行。中盤は追加点が取れず中村に1－1と追いつかれた。だが9回になって中村・宮崎の制球が甘くなったところをとらえてすかさず3長短打して2点を奪い試合を決めた。

中村も疲れの見える宿毛・森本を攻め込み、7安打と8四死球の走者をにぎわした。終盤近くの7回に今城の左中間二塁打を足場に走者を進め、森の犠飛で同点に追いついた。9回には二死から連続四球で好機を持ったが、下元の左中間への当たりが守備位置を変えていた左翼小島の好捕にあって追加点が取れなかった。



【宿毛－中村】9回表宿毛一死三塁、恩地康が左前打を放ち3－1とリードを広げる。三塁走者森本(春野球場)

①吉川昌、宿毛を3安打完封

春季四国地区高校野球大会への出場をかけた県

代表決定戦は4月14日、春野球場で行われ、明德義塾が1－0で宿毛を下した。明德の春季四国大会出場は7年ぶり5度目。

試合は宿毛が先発森本、明德は吉川昌が登板し点差の少ない試合展開となった。明德は2回裏に二死から吉川悦が森本のストレートを左越えに本塁打。これが随一の得点となったが、力のある明德はボール球に手を出すなど大振りが目立ち、6安打の1点にとどまった。

一方、宿毛は森本が2回に本塁打されると3回にすぐさま左腕小島を起用、以後は緩いカーブを多投、強打の明德打線を4安打に抑えた。だが攻撃面で明德の吉川昌に散発の3安打、11三振を喫して1回の二死二、三塁と3回の一死二塁の好機をつぶした。

主力のバッテリー欠場 控え投手総動員で臨戦

第49回春季四国地区高校野球大会は5月3、4の両日、香川県営球場に四県代表4チームが参加して開かれ、地元代表の尽誠学園が初優勝した。

本県代表の明德義塾はセンバツ大会で8強に進出したため、吉川昌－梅山のバッテリーがマニラで開かれるAAAアジア選手権のメンバーに選ばれた。このため、今大会は主力抜きの陣容となり苦しい戦いが強いられた。馬淵史郎監督も「主力のバッテリー抜きでどこまで戦えるか試す絶好の機会」と控え投手を総動員して戦いに臨んだ。だが1回戦は松山商に3－2で勝ったものの、決勝戦で尽誠に7－4で敗れた。

②公式戦初登板の竹内で辛勝

1回戦は同じ選抜大会に出場した松山商と対戦、相手に先行されていたが、わずか3安打ながら終盤に3－2で逆転勝ちした。

エース吉川昌が欠場の明德義塾は竹内が登板したが、松山商は3回に二死からドカベン今井の右越え本塁打で先制。6回にも1点を加えて有利に試合を運んでいた。

これに対し明德は5回表に一死から吉川悦が左翼ポール直撃の本塁打で1点を返したものの敗色が濃かった。しかし、8回に相手ミスに乗じて無安打で再び同点に追いつくと、9回には右前打の江幡を手堅く送り松岡の中前適時打で3-2と逆転勝ちした。公式戦初登板の竹内は松山商に7安打され8四死球を出し危なかった。だが9回裏に二死二塁のピンチに強打者今井を敬遠、次打者渡部のヒット性の二塁ライナーを江幡が好捕して辛くも逃げ切った。

⑩投手総動員も12安打浴びる

決勝戦の明德義塾-尽誠学園は投手陣が不安な明德は山本、武田、竹内の3投手を総動員したが、尽誠打線に12安打され7-4で完敗した。

地元代表で意気込む尽誠は3回にボークで1点。4回には一死二塁から2連打で2点と点差を広げ、7回には小西、川西の2本塁打などで4点を取り大勢を決めた。

敗れた明德は3回に鎌田の左中間二塁打、松岡の左前適時打で1点を先行していたが、中盤は逸機。最終回に松岡、佐伯の連打と四球で無死満塁と攻め込み、吉川悦の犠飛と2連続四球で3点を返したが、後続打者が断ち切られた。

なお、今大会は9本塁打が出て春季四国地区大会の1大会新記録をつくった。これまでの最多本塁打は昭和62年の7本塁打。

宿毛、明德敗れる波乱 遠近（土佐）が1大会4本塁打

第49回県高校体育大会野球の部は5月25日から

28日まで高知、東部、春野球場に30チームが参加して開かれ、波乱の末、決勝で高知が土佐を下し2年連続23回目の優勝を飾った。

今大会は夏の甲子園県大会のシード権（4校枠）を巡って激しい攻防戦を展開。1回戦で春季県予選の優勝校宿毛が3-4で須崎に屈した。この試合で宿毛は大黒柱の森本が登板せず、先発に兼松、7回から白石がリリーフした。須崎は5回に5安打、1四球で大量4点を取ったが、宿毛は須崎の北原に4安打に抑えられた。

2回戦では優勝候補の明德義塾が1-3で室戸に敗れる波乱があった。明德もこの試合でエースの吉川昌が投げず、先発に竹内、7回から吉川悦がマウンドに立った。室戸は5回に猛攻、一死から山本の右中間安打、川田の四球のあと、浜口の右中間三塁打、浜岡の右翼線二塁打で3点を取り中盤で試合を決めた。これに対し明德は1回に1点を先行。7、9回を除き毎回走者をにぎわしながら6安打の1点にとどまった。

準々決勝に進むと高知商-高知高専が延長17回の激闘を演じた。0-0で進んだ17回裏、高知商は一死から籠尾の四球で足掛かりをつかみ、加納が右越えに2点本塁打、鮮やかなサヨナラ勝ちを決めた。

また、同じ準々決勝で高知も安芸を相手に苦戦した。5-6と劣勢だった高知は9回に二死無走者から攻勢した。徳橋が2-3から粘って四球で出たあと、谷口が右越えに本塁打して逆転勝ちした。敗れた安芸は14安打を放ちながら8安打の高知に屈した。

準決勝では息を吹き返した高知が11-2、7回コールドで清水に快勝。また、前日に高知高専と激闘17回の延長戦を演じた高知商は力が尽きたのか、2-5で土佐に敗退した。

⑪高知が14安打で大量16点

決勝戦の高知-土佐は両チームとも準決勝で主

戦投手を使い、連戦のため二、三番手の投手で立ち向かった。これが災いし攻撃力のよかった高知が16－5で土佐に大勝した。

攻める高知は1回に二死満塁から宗崎の中前適時打で1点を先制すると、2、3、4回はともに3点ずつを取って大勢を決定。5回には谷口の3点本塁打などで大量4点。さらに7回にも浜田啓が左越え本塁打を放ち、土佐の3投手から14安打を奪い、22四死球を得て大量16点を奪った。

敗れた土佐は2回に無死から遠近が右越えに本塁打。4回に1点、7回に3点を取ったが5安打で5点にとどまった。

なお、敗れた土佐の遠近卓士左翼手は今大会1回戦の対高岡、2回戦の対須崎、準決勝の対高知商、決勝の対高知と1大会4本塁打を放った。1大会最多本塁打は昭和50年県体での杉村繁（高知）の4本とタイ記録。

決勝は延長の大接戦 13回、明德が土佐下す シード校が4強進出

第78回全国高校野球選手権県大会は7月20日から28日まで高知、春野の両球場に30校が参加して熱戦を繰り広げた。

今大会は投攻守にまとものある明德義塾が優勝争いの最右翼と目され、これに土佐、宿毛、高知、高知商などが追う形と前評判されていた。しかし、本番に入ると春野球場での1回戦の開幕試合、高知西－西土佐から早々と延長戦に突入。11回の攻防の末、高知西が8－6で辛勝する一戦があった。また、高知南－高知商も接戦となり、0－1と苦戦していた高知商は8回に山下が左越えに逆転の2点本塁打を放ち2－1で高知南を振り切った。

中盤戦になると高知、土佐、高知商、明德義塾に追手前、中村なども上位に進出。この中からベ

スト4には高知、土佐、高知商、明德義塾のシード校が順当勝ちした。

準決勝の高知－土佐は延長12回の攻防となり土佐が4－3で高知に辛勝。また、明德義塾－高知商は明德の吉川昌が貫禄を見せ高知商打線を3安打、10奪三振と好投、4－1で下した。

決勝戦の明德義塾－土佐も締めくくりの一戦にふさわしく5－5のまま延長戦に突入。攻防13回の末、明德が7－5で土佐を振り切り、夏の甲子園は4年ぶり4度目の県代表となった。なお、夏の県大会決勝の延長戦は1県1代表になって以来、3度目だった。

⑬12回、土佐が劇的サヨナラ

準決勝の高知－土佐はシード校同士が決勝進出を目指して伯仲した攻防戦を展開。高知・田辺、土佐・猪野の好投もあって予断のできない激突を繰り広げたが延長12回、土佐が安岡の劇的な一発で4－3と高知にサヨナラ勝ちした。

3－3で進んだ12回裏、土佐は二死から初球の速球を狙い打った安岡の左越え本塁打で3時間10分にわたった激闘に決着をつけた。その一瞬までの戦いは高知が10安打に13三振、土佐も9安打に15三振と全く伯仲していた。

高知が6回表に3点を取ればその裏、土佐も無死一、二塁から杵島が右へ二塁打して1点。3連続四死球で2点を加え同点とした。土佐は各打者が早いカウントから打って出て高知攻略に成功していた。

⑭吉川昌、高知商打線を3安打

続く明德義塾－高知商は王者明德が自信にあふれる戦いを繰り広げ4－1で高知商を退けた。

2回は四球を足掛かりに吉川昌の内野安打でまず1点。4回は二死一、二塁から高見の左越え二塁打で2点を追加。8回にも高見のタイムリーで